

人は争うと賢明な判断が出来なくなるらしい。戦が長引くほど人々の暮らしは荒れ、明日食べるものにも困る者が増えた。兵士たちも例外ではない。

「やめて！離して！」

「おい早くしろよ、降ってきやがったぞ」

「女のくせに力強いんだよこいつ！大人しくついてこい！」

薄い生地 of 衣装を引き裂かれ、踊るために鍛えてきた身体が雨の中に晒された。どうにか身を守ろうと抵抗したって、鍛えた兵士に敵いっこない。ぬかるむ地面で必死に踏ん張ると、足が滑ってそのまま泥の中へ転んでしまった。

「まったく手間取らせやがって！」

「よかったなあ、若い女ってだけで価値はあるからよね。変態貴族に可愛がられるだけだよ」

ぐらりと兵士に囲まれてしまう。私の人生ずっとこうだ。ずっとずっと、報われない。踊って、笑って、客を楽しませて。そうやって金になる間だけ、私は生きていける。それすら奪われるなら、いっそ誰かの愛人になってもって生き延びたほうがマシなのか。

「さっさと連れてけ。雨が酷くなる」

「これだけ若くて顔が良けりゃ、高く売れるだろ」

急に抵抗しなくなったのを同意とみなしたのか、いくつもの腕がのびてくる。気持ち悪い、誰か、助けて！自分じゃどうしようもできない無力さに唇を噛んだ。そんな無音の叫びが届いたのだろうか。

雷と共に大きな地鳴り。小動物たちは一目散にその場から逃げ、分厚い雲が空を覆った。男たちの間から見えたのは、雫を滴らせた、冷たい蒼。

「はは、戦場で盛るとは悠長なことだな？」

ごう、と唸るような風は大きな翼が起こしたと分かるのに時間を要した。圧倒的な力の差、畏怖に近い感情が身体を硬直させる。

「な、なななんだあの化け物！！」

「あの顔の鱗……！竜王だ！逃げろ！！」

危険を察知してから逃げるまで早いのは、さすが兵士というところか。ぬかるんだ土を踏みしめているのに、音もたてず竜王は近づいてくる。

「なんだ、お前は逃げないのか」

腰抜けて逃げれないんですよ。なんて声が出る状況じゃない。

豪華な衣服に艶やかなブロンズの長髪はどこかの貴族のようだが、背中の翼と蛇にも見える金色の目が人間でないことを示す。

ぎょろりと金色の瞳が私を見下ろした。恐怖から踵で地面を蹴っても、空振りして浅い穴を作るだけだった。

「……立てないのか」

長く鋭い爪のある手が伸びてくる。思わず肩を震わせると、その手はぴたりと止まった。

「取って食ったりはしない」

「今の状況で信じられる？」

「口は回るようだな」

にたりと笑った唇の奥から、尖った牙が覗く。全然安心できない。

「生きたいか？」

「……は？」

「あの連中が戻ってきても、一人で生き延びられるのか？」

答えられなかった。踊って金を稼ぐことならできる。でも剣も持てない私が、こんな場所で一人になればどうなるかくらい分かっている。

「俺の庇護を受けるなら、ここから連れ出してやる」

「……代わりに、何をするの」

「今は何も」

そんなわけない。誰かが無償で助けてくれるほど、この世界は優しくない。

「契約には印が必要だ。口づけることになるが」

金色の瞳が静かに私を待っている。嫌なら断れる。そう分かっているのに、背後に広がる荒れ地を見れば選択肢なんて一つしかなかった。

「……死ぬよりはマシ」

「そうか」

顎に触れた爪は、見た目に反して慎重だった。ひたり、と冷たい唇が重なる。ほんの一瞬だったはずなのに、舌先が焼けるように熱くなる。

「っ……なに、これ」

「契約は成立した」

目の前の竜王は、満足そうに金色の目を細めた。

「今日からお前は、俺の宝だ」

宝。随分綺麗な言い方をするものだ。結局この竜王も、私に何かしらの価値を見つけたから拾っただけなのだろう。

それなら、その価値がなくなるまでは生きていける。私の命は、また誰かに必要とされることで繋がった。

「……ああ、私の人生、ねじ曲がっちゃった」

それがつい三日前のこと。部屋の鏡にべっと舌を出して見ると、読めない文字のような印が舌先から刻まれている。使用人に聞いても「主人から直接お聞きください」と妙に口を濁された。竜王の所有物ってことが書かれてるんだろう。

連れ帰られた館は想定通り立派なもので、客室として使われているらしい一室を宛てがわれた。今まで住んでいたところの何倍も広くて落ち着かない。

物心ついたときには両親はもういなかった。各地を渡り歩き、踊りをお金に換えて一人で生きてきた。自分では取り立てて綺麗だと思ったこともない貧相な体と、平凡な顔でお金を稼ぐのは難しくて。綺麗に踊れて、客を楽しませられる間だけ自分には価値があった。

宿代すら惜しくて野宿することも多かったから、こんな部屋に住むなんて考えたこともない。衣食住が保証され、不自由ない生活。これで竜王に連れてこられたんじゃないかなかったら優良物件なのに。静かな時間はそう長く続かないらしいけど。

「ルカさん、主人が呼びです。衣装を着ていらしてください」

「衣装？」

「クローゼットに」

部屋の外から声をかけられ、備え付けのクローゼットを開くと思わず目眩がした。今まで着たどの衣装より高価だと分かる品ばかり。

これを着ろと？こんな高いもの用意して、今度は何をさせる気なんだ。ばっくれてやろうか、と考えるけど、一人で安全な場所まで逃げる算段もたたない。

「はあ……腹括るか」

一番手前の衣装を手に取り、腕を通した。

呼び出された大広間はぐると観客席になっており、使用人や招待された人ならざる者たちが私を見定めていた。三日間、部屋で食事やシャワーを済ませていたから気づかなかったが、本当に広いんだなこの館。

「今夜は俺に、お前の舞を見せてくれ」

「……ここで？」

見世物にでもする気？低くお腹にまで響く声に、震える背筋を無理やり伸ばして虚勢をはる。

「断ったら？」

「それならそれで構わない」

え、断っていいの？じゃあ私は何のためにここにいるの？何も返さないまま養われるなんてあり得くない？いつかもっと大変なことを要求される……？なら今踊ったほうが、まだマシか。カツンとヒールを鳴らして舞台に立った。

最初の一拍が響く。メロディーに合わせて柔らかに腕を伸ばした。緩急をつけて腰を揺らしながらステップを踏み、回る。

物心ついた頃から、私には踊ることしかなかった。人より綺麗に、人より目を引くように。客が金を払う価値のある踊り子になるために。誘惑して、優雅に美しく。見られて、求められて、金になる間だけ私は生きていける。

ぐると色んな視線が突き刺さる。嫌悪、興味、無関心、揶揄い。その中には色欲や羨望があることも。それでいい、見られている時間だけ私は生きていけるんだ。

ばちっ。

金色の瞳がヴェール越しに私を射抜いてくる。凍てつくような冷たさなのに、肌をなぞる視線は熱い。まるで、頭のとっぺんから脚の先まで、じっとり触れられているみたいだ。

あれはたまに受ける……いや、そんなわけない。けど、その視線が本心なら、私は利用するほかなかった。意図的に竜王へ微笑みかける。最大限、愛おいしい者へ向けるように。

恐怖の奥で揺れる、甘い承認欲求が顔を出す。あの、全てを射止めるような鋭い瞳に貫かれない。その支配欲で縛って、私を生かして、と。

音楽が止まり肩で息をする。疲れた、思ったより長い曲だった。竜王はゆったり立ち上がり、服の装飾が揺れる音が会場に響く。

「こちらへ」

静かな命令が鼓膜を震わせる。私はまた大きく息を吐いて、真っすぐ足を進めた。こんな人……？前で何をさせるつもりだ。でも、今さら逃げるのも格好悪い。偉そうに待っている竜王の前で足を止め、思い切り睨み上げる。なんでそんなご満悦な顔してるわけ。

「ふふ、気に入った。名は？」

「……ルカ」

ゆったりと手をとられ、冷たい唇が落とされた。どよめいた観客の声に飛びのけば、竜王は楽しそうに目を細めている。

「ルカは俺の宝となった。皆、手出しするなよ」

そんな、わざわざ呼び出して私を踊らせる人なんて誰もいないだろうに。何の牽制なんだ一体。

「ルカ、着いてこい」

大きい手が差し出される。ジロジロ見られるのも疲れたし、とその手をとれば、思ったより優しく握られた。連れてこられたのは竜王の私室。広い部屋に据えられたクイーンベッドに座らされた。

なんだ、やっぱりこいつに身体を売らなきゃいけないんだ。もう踊るだけでは生きていけないよね。

「……踊りだけじゃ満足できなかった？」

「うん？舞は悪くなかった」

竜王は微笑みを携えたまま、私を見下ろす。数本の蝋燭で灯された薄暗い部屋に、金目が私を射止めた。

「むしろ、足りない」

何が……と聞く前にベッドが軋んだ。伸びてきた手が、腰へ触れる寸前で止まった。恐怖か興奮か分からない震えを収めるよう、きゅっとシーツを掴む。

「触れても、いいか」

「好きにすれば……」

竜王は少し口の端を吊り上げて顔を寄せた。啄むようなキスだけで頭の奥がパチパチと火花のように弾ける感覚。力が抜け始めると、腰を引き寄せられた。

「お前を抱きたいんだが」

「……契約で命令でもしたら？」

「寝床も食事も、お前の身体と引き換えに与えたものじゃない」

じゃあなんで、と真意を探るように見つめれば、三日月のように瞳が細められた。

「俺がお前に触れただけだ。だから、お前が嫌ならしない」

「そうやって面白がって、適当に捨てるんでしょ」

「宝を適当に捨てる奴がいるか？」

そっと手が離れていき、ぽかんと口を開けて竜王を見上げる。ここまで来て？ほんとに部屋に戻っていいの？でも、ここ3日間何不自由ない、なんならいい生活をさせてもらった。今後この生活を続けるために、私ができることは。

震えを悟られないように、身体を起こして唇に触れる。それを合図にしたようにまたシートへ押し倒された。

ぐちゅ、じゅる……♡

わざと水音を響かすようなキスが何分にも思えるほど長く続けられる。身体の芯が燃えるように熱い。触れられているだけなのに、神経までじわじわ熱を持っていく。

「んう！♡あ、ふ、う……♡」

「もっと口を開けろ」

がばりと開いた口に並んだ鋭い牙を見て、反射的に口を開ける。捕食されるように吸いつかれ、長い舌が歯の裏から喉の入口まで丁寧に、強引に舐ってきた。

息ができない。苦しくて、怖いのに、なんでこんなに気持ちいい……♡

「俺の名を呼べ」

低い囁きが耳に吹き込まれた。助けられた日、教えられた名を思い出す。覚えてる、けど。名前を呼んだらもう、戻れないかも。何かの契りが本当に成立してしまう気がする。

でも、それでも。この屋敷から出ていくのは困るから、抱き込まれて逃げられないから。色々な理由を重ねて、一度も呼んでいないそれを呟いた。

「アシュ、レイ……」

口から零れた名前に、竜王——アシュレイの喉が小さく鳴った。瞳が細められ、鋭い光が柔らかくなった気がする。

喜んでるの……？もう一度呼べば、猫みたいにまた喉を鳴らして、腕の力が強くなった。背中を包む腕が鎖のように重いのに、温かい。

「やっと呼んだな」

「呼ぶ必要、無かったし……」

「ふ、それもそうか」

尖った鼻がすり、と寄せられたと思えば耳朵を噛まれる。瞬間、息が止まった。鋭い牙がわずかに触れ、すぐに柔らかく舌でなぞられる。食いちぎられるかと思った。シーツを強く握りしめ、身体が強張る。牙を向けられる恐怖と、頭の奥が痺れる感覚で胸が痛い。

「……ここが、弱いんだな」

「急所、ではある……でしょ♡」

あぐあぐと甘噛みされ、少しずつ快感が上回っていく。そのまま柔らかいベッドに押し倒される。熱い。触れられたところから、全身に火が走る。人間の温もりとは違う、もっと濃くて、強い——獲物を丸ごと包み込むような熱。

見た目とは裏腹に、優しく衣装が脱がされて下着も取り払われる。晒された上半身に冷たい空気と、アシュレイの熱い手の平がぶつかって背筋が震えた。ふに、と小さい胸を楽しむように指が沈められる。

怖い、やめて……やめなきゃ——そう思うのに。つんと立ち上がった頂を爪で掠められたとき、恐怖以上の何かが思考を奪った。

「んあッ♡あ、アシュレイ……まって……」

「痛いかな？」

「ちが、急に触るから……」

「なら、ゆっくり、な」

視界がぼんやり暗くなった。広げられた翼が、ベッドごと私を覆ってしまう。外の光も音も遮られて、ここには私とアシュレイしかいない。

「お前はただ、身を委ねてればいい」

「ひうっ！あ……、んん♡は、あ」

喉元に舌が這い、首筋を辿って鎖骨まで濡らされる。たまに当たる歯が甘い痛みをもたらして、ねだるように顎が上がった。ぞくぞくとした熱が下腹部に溜まっていく。

「っ……そこ、やあ……っ！♡」

「弱点が多いのも、困りものだな？」

「ふ、う……、そこで、喋ん、ないで♡」

ふふ、と笑った息が耳奥に響いて腰が浮く。低い囁きは自分を支配してくる恐怖の対象のはずなのに、もっと聞きたいとも思ってしまう。

かりかりっ♡こりこりこり～♡

胸に触れた爪先が、ほんの少し肌を引っ掻く。チクリとした刺激のあとに、長い舌がそこを舐めて癒す。痛い、きもちい。痛い、きもちい。与えられる刺激がぐちゃぐちゃで頭がおかしくなりそう。

「は、あ！♡も、やだ……、服着れなくなる……う♡」

「そうしたら、いい布の衣装を用意させよう」

「そういう問題じゃ、な……！ああ、ん！♡♡」

てらてらと唾液で光る乳首は真っ赤に膨れ上がって、見せつけるように弾かれて腰を突き上げた。

その隙に下も脱がされ、一条まとわぬ姿にされる。

思わず両手で下半身を隠すと、アシュレイは不服そうに眉根を寄せた。つーっとヘソ周りをつま先でなぞってくるのに、いちいち腰が震える。

「ここまできて何を恥ずかしがってる」

「こ、こんなところ見せたことないし」

「では俺が初めてか。光栄なことだな」

揺れる金目が近づき、また唇を塞がれた。あやすような、短いキスを何度も何度も。

やめてよ、そんなの。お金のためにたくさんのことを我慢してきた過去が馬鹿みたい。勘違いしてしまう前に、と胸を押し返した。

「気持ちよさそうだな」

「は、あ♡うるさ……っんう！♡」

「とても、綺麗だ。ルカ」

貧相な面白みのない身体を見て、アシュレイは今までで一番優しく笑った。中心の一番柔かいところがぐちゃぐちゃに捻り潰される感覚。私をその気にさせるための言葉だとしても、それでも良かった。

爪が腰骨をゆったりなぞり、秘部へと近づいていく。触れられていないのに既に濡れているのが自分でも分かる。恥ずかしくて顔を逸らすと、顎を包まれて正面を向かされた。

今、爪を突き立てられたら。首を噛みちぎられたら。命の危機にさらされているのに、額を伝ったのが冷や汗か、熱のこもったものなのか分からなかった。

「目を逸らすな。……その顔、もっと見せろ」

「ああああっ！♡♡あ、つよ……っ、あ、う、うあん♡や……だ、そこ……っ、ああ……♡」

ちゅこちゅこっ♡ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅっ！♡

熱い手の平に包まれ、腫れたクリを摩られる。直接的な刺激に脳みそが焼き切れていく感覚に包まれた。反応を楽しむように細められた金には、快感に溺れていく自分の顔が映っている。

悔しい、認めたくない。こんな得体の知れない奴に流されたくない。そう思うのに、口からは媚びるような甘い声がとめどなく溢れた。

「人間は柔いからな」

「は……？ちょっと待って。なんでそんな……」

どこから出してきたのか、アシュレイの手にはごつごつと黒光りした太いパイプ。見せつけるように長い舌が下から上へゆっくり舐め上げて、その色気に思考力が落ちていくのを感じた。

「俺の爪では傷つけてしまうだろう？」

「そうだけど、そんなの入らない！」

「では、このまま？」

ごりっ。押し当てられた熱は想像以上の重量で、言葉を失った。無理、壊れる！破裂する！！

それならまだ……と唾液で濡れた玩具を見て唾を飲み込む。

「……急には入らないから、まって」

アシュレイは心底楽しそうに喉を鳴らした。

ぐちゅぐちゅ……♡ちゅっ、くちゅ♡

これもケガしないため。自分を守るためと言い聞かせて、三本目の指を埋め込んだ。

「あ……う、は……っあんッ！♡」

「なんだ、慣れてるじゃないか」

「邪魔、しないで……ッ！あうっ、んう～～！♡」

旅芸人として色恋や男女の事情は嫌でも見てきた。性知識もあるし、オナニーだってしてる。それでも、なけなしの知識で必死に拵げてるのに！！

アシュレイは暇なのか乳首を引っ掻いたり前を擦ってきたり。どんどん苦しさ快感に侵されていく。手元が狂って、避けていた自分の良いところを抉った。

「んあっ！？♡♡もう……、う、ああ……♡」

「ナカで気持ちよくなれて偉いな」

「はは……、なにそれ……ッ♡♡うあんっ！？♡あ、あ、あああああ
あ！！♡♡」

ぐぶぶぶぶぶぶ~~~~~♡びくびくっ！♡

急に手を掴まれ、指を引き抜かれる。そのまま間髪入れずにバイブを突っ込まれて、勢いのまま絶頂してしまう。それでも、アシュレイは手を止めずにバイブを抜き差ししてきた。

「ああああっ！！♡まって、まてまて！いった、イ……ったからあ……♡
なん、か、え？♡は、あ……なんで、え？♡♡」

「初めてでここまで感じるのか。ルカは敏感なのかもな」

「うるさ……ッ♡ふ、う！あ、まって、はや……いい！♡♡あ、そこそこ……だめ、え♡♡」

ナカをゴリゴリと擦っていくバイブは、容赦なく押し広げていく。緩急も角度も全て握られている快感は、いつどこからやって来るのか分からない。

気持ちいい、知らないこんなの♡もっと、やだ、もういらぬのに♡♡

「ん"んんんっ！♡あ、そこお！むり、やだやだ、あ"あっ！？♡♡ひ、
もお……♡イっちゃ、イっちゃう、からあ……っ♡♡」

「はは、ここか。覚えておこう」

ぐりぐりぐり♡じゅこじゅこじゅこっ♡♡

弱いところを押しつぶされ、目の前がチカチカと弾けた。どんどん快感に塗りつぶされるのに抵抗しようと足掻く脚を抑え込まれる。自分から発されているとは思いたくない水音が、翼に閉じ込められた空間に響いて逃げ場所がなかった。

「あ、ああ……！♡また、イク！イクイ"……ッ！♡は……あ、なんで、え……？♡♡」

「達するなら俺ので、な？」

ぶるんっ！♡

音がしそうなほどそそり立ったアシュレイの陰茎は大きく、思わず腰が引ける。人間とは比べ物にならないほどの長さで太さ。引き抜かれたパイプが可愛く見える。

いや無理無理こんなの！裂けるって！！無意識に逃げようとシーツを蹴れば、覆いかぶさり口を塞いでくる。

「んんっ、あ……、んちゅ♡あ、う♡」

「ん……ゆっくりする」

「ひっ……、あ、ああ……っ！？♡♡ま、なにこ、れえ！！♡♡♡ひう"う"う"う"うッ！♡♡♡」

びくびくびくっ！♡ぬぷ~~~~~♡♡

身体が引き裂かれるような質感に気持ちいいことしか考えられない。またナカイキしても、アシュレイの熱い陰茎は止まらず、浅いところを抜き

差しされ理性が焼き切れた。恐怖を上回る快感でキャパオーバーなのか、ずっと身体が震える。

「気持ちいいところは、ここだったか？」

「まって、まって……っ！♡いった、からあ！♡♡あ、あ"あ"あ"ああああ！！！♡♡い、やあ……っ、あ、ん"んんっ！♡♡」

ぐふふふふふ♡どちゅ♡♡

ゆっくりと押し込まれ、狭い膣内がめりめりと押し広げられていく。苦しさで熱さで涙が滲むのに、ナカを締め付けるたびにアシュレイの肉棒を感じて腰が揺れる。媚びているみたいでやめたいのに、嬉しそうに輝く金目を見ると身体が反応してしまった。

すり、と腰やお腹を撫でられる。大きな体とは裏腹に優しい手が這う。手酷くしてくれたら、ただ我慢すればよかったのに。耳まで流れた涙を拭われ、そのまま唇を吸われる。

「う、んあ……♡」

「ふ、いい子だ」

なんなのその目、その声。ドロドロに甘くて溶けてしまいそう。でも、それもこれもアシュレイの娯楽で。飽きたらどうせ捨てられる。私は契約を引き延ばすしか、生きる方法がないんだ。

ぱちゅ……ぱちゅぱちゅ、ぱちゅん♡じゅる、ちゅふ……じゅっ♡♡

キスが気持ちよすぎて、素直に自分から舌を招き入れる。長い舌が喉奥まで侵入してきて苦しいのに、膣の裏が真っ白になるくらい気持ちいい。

ゆったりしたストロークはナカのすべてを押しつぶして、内臓を押し上げられる感覚に怖くなる。戻ってこれなくなる予感に太い腕を掴むと、そのまま背中へと導かれた。

「しっかり掴まっている」

「んあ♡あ"っあ"っ、ああ！う"、あ、お"お！？♡ま、むり！ふか……う、おごっ！♡♡きもちよすぎ、るう♡♡はあ、あ、あ"あ"ああああああ！！？♡♡♡♡」

「ルカは甘いな」

「んう！♡やめ、とまってえ……！あ、おかしくなっちゃ、う♡や、あん！♡♡くるし……ああっ♡♡おく！子宮は……だ、めえ……！お"お"おお~~~~~♡♡♡」

ぐぼぐぼぐぼっ！♡パンパンパンパンパンパンパンパンパン！♡♡

最奥を貫かれ、子宮を龟头が力強く突いてくる。入り口を鈴口が出たり入ったりするたび背骨がビリビリ痺れた。首筋に鼻を押し付けられ、深く息を吸い込まれる。喉元に牙がかすめた瞬間、思い切りナカを締めつけた。

「はっ……ああ、ん……！♡♡」

「ん、噛まない。今は」

「い、まは……？」

「ルカが他の奴に、身体を明け渡さなければ」

べろり、鎖骨から首筋にかけて長い舌が舐め上げた。ぞわぞわと全身を駆け巡ったのは、恐怖と支配と、満たされる感覚。

もっとこの目に見つめられたい。支配されたい。求められたい……♡

回した腕を後頭部へ移動し、自らキスをした。その大きな体で、翼で、手で、包み込んで抱き潰してほしい。いつか捨てられるのなら、与えられる限りこの快樂を貪っていたい。

「もっと……ちょうだい、アシュレイ」

「はは、仰せのままに」

「うあ、うっ、あ"あ"あ"あ"ああああんッ！♡♡そ、こそこお……♡すき、もっと、もっとお、お"♡う"、ぐ、う、う、ああんッ！♡♡♡もれちゃ、あ、あ、あああああ！」

プシッ！♡♡びゆるるるるる！♡♡♡

勢いよく潮を吹いて目の前が真っ白になる。今まで浴びたことの無い快感に身体はすっかり壊れてしまって、断続的にびくびくと跳ねた。

大量の熱いザーメンがおへそのあたり出されて、そういえば今日まだ何も食べてないことに気づく。最悪だ。性欲のあとは食欲って、あまりに生き急ぎすぎ。

「あつい……♡」

「ほら、脚を持っている」

「……え？まだやんの？ちょっと休憩っ！」

「俺はまだ一度しか達してない」

「知らないってば！！ああんッ！♡」

夜明け……というよりも朝。身体のあちこちが軋むように痛い。普段柔軟に力を入れているとはいえ、今日は一步も動けない気がする。気絶するように寝ていたらしく、ふと意識が浮上した。体勢を変えようと横を向くと、アシュレイが静かに眠っている。

驚きで声が出るのを抑えて息を止めた。長いまつ毛は時折震えて、ブロ
ンズの長髪がカーテンから漏れ出た朝日に輝いている。

あまりに無防備すぎない？ここで私が寝首を搔いたらどうする気だ。そ
んなことやれるもんならやってみろってか。なんかイライラしてきた。

シャワーでも浴びようとベッドから降りようとした時、パッと腕を掴ま
れて今度は本当に叫ぶ。

「うわあ！？寝てたんじゃないの！？」

「……どこへ行く気だ」

「どこって、シャワー……きゃっ！」

言ってる側からまた布団に引き戻される。そのまま抱き締められ、啄む
ようなキスが降ってきた。

やばい、また朝っぱらから昨日みたいなことになったらたまったもんじ
ゃない！ぎゅっと唇を引き締めれば、そのまま大人しく離れていく。まだ
寝起きで頭が回っていないのか、アシュレイはそのまままた寝息を立て始
めた。

「いくな……」

ぽつりと落とされた言葉は知らない誰かのものみたいで。

「どこに行くっていうのよ」

私の言葉に返事はなかった。

■この後の展開

竜王アシュレイに“宝”として拾われた踊り子ルカが、彼の庇護と溺愛に少しずつ逃げられなくなっていく。

何もしなくても、当然のように与えられる食事と居場所。
ルカはそれを、“踊れる自分に価値があるから”だと思い込もうとする。

そんな中、アシュレイの寵愛を妬んだ者によって誘拐されてしまい……。

- ・アシュレイからの寵愛に気づき、両想いになる二人
- ・抜かずに中出しされお腹いっぱい♡なルカ
- ・柔らかい身体を利用してまんぐり返しの極太ちんぼ種付けプレス
- ・孕ませる勢いのらぶらぶ中出しえっち♡
- ・最後は溺愛ハッピーエンド

踊れるから価値がある。

役に立つから傍に置かれている。

そう思っていたルカが、

踊れなくても、何もしなくても、“宝”として愛されていく。

続きが気になる方は、ぜひ予告ページをお気に入り登録してお待ちいただけると嬉しいです！

お気に入り登録していただくと、発売時に通知が届きます。